

避けては通れない “歯科心身症”を理解するために



デンタルスタッフのための 歯科心身症ガイドブック

和気裕之・澁谷智明・目加田まり 著

B5判/92頁 定価：本体4,200円＋税
医歯薬出版（2015年10月）

評・土屋和子（株式会社スマイル・ケア）



「口の中がざらざらして砂でいっぱいのようなです。だから舌が痛くてつらいんです。何とかしてください」、そう切々と訴えたのは64歳の女性でした。「歯磨きは1日に1時間くらいしますし、うがい薬は2～3日で1本を使い切ります。でも、口臭のせいでみんなに嫌われるんです」と嘆くのは、28歳の女性でした。上下左右臼歯のセラミッククラウンが一夜にしてすべて破折してしまったのは、21歳の男性でした。「なぜ、こうなる?」「なぜ、わかってもらえない?」……考えても理解ができないことばかりでした。

本書によると、現在精神疾患で医療機関を利用している人は300万人以上、日本人の40人に1人が該当し、生涯有病率（調査時までに精神疾患にかかったことのある人の割合）は約20%とのこと。また、精神疾患があるものの治療を受けていない、といった潜在的な患者

さんなども含めると、歯科医院には毎日1人以上の精神疾患のある患者さんが来院している可能性があるそうです。日本心身症学会によると、“心身症”とは「明らかな身体疾患があり、心理社会的因子によって身体症状が発症したり、増悪したりする病態であり、神経症やうつ病などの精神疾患に伴う身体症状は除く」と定義されています。一方で“歯科心身症”とは「歯科で心身医学的・精神医学的な対応が必要なすべての疾患」という広い概念です。つまり、私たちが歯科心身症の詳細を理解しなければ、思わぬところで患者さんに不信感などを抱かせてしまい、スムーズに信頼関係を構築できなくなるかもしれません。

本書は、舌痛症や顎関節症、味覚異常、特発性歯痛など、歯科医院でも多くみられる歯科心身症の特徴や発症のメカニズムが解説され、歯科心身症がとても身近なものであることに気づかされます。臨床における対応としては、まず患者さんを多角的に診ることができる基本的な評価法として“SOAP”が紹介されています。しかし、心身医学・精神医学的な問題を抱える患者さんに対しては、SOAPだけでは対応が困難な場合があるため、さらに“MW分類”という評価法が紹介されています。これは、患者さんの抱える問題を自覚症状、他覚症状の程度等に基づき分類する方法で、この対応の指標から歯科における治療方法が明確になることを学ぶことができます。

最後に、著者である和気先生の「歯科臨床で診るのは病気だけではなく、患者さんそのもの。症状のあるところだけを見ていたのではわからないことがたくさんあります」とのコメントに、本書に対する先生方の信念が表れているように感じました。